

第6回 有害事象とグレード



がんセンター 臨床研究コーディネーター 小幡 泉

「有害事象」という言葉を最近よく見かけようになりました。臨床試験ではよく使用する言葉なので、ご存知の方も多いと思いますが紹介しておきます。

有害事象

薬物を投与された患者（被験者）に生じたあらゆる好ましくない医療上のできごと。因果関係の有無は問いません。

副作用

有害事象のうち薬物投与との因果関係が否定できないもの

がん領域で臨床試験をしますと、有害事象だらけになります。食欲不振、倦怠感、口内炎……。そのため試験によっては症状がひどい場合のみ、データとして記録することがあります。その場合も診療としての記録はカルテ等に残しますが、データとしては収集しないということになります。

有害事象は症状の程度によって、グレードを付けていきます。グレードを付ける作業はアメリカの国立がん研究所が発行している「有害事

例：食欲不振（定義：食欲の不振）

グレード0	問題なし
グレード1	食生活の変化を伴わない食欲低下
グレード2	顕著な体重減少や栄養失調を伴わない摂取量の変化
グレード3	顕著な体重減少や栄養失調を伴う
グレード4	生命を脅かす、緊急処置を要する
グレード5	死亡

象共通用語規準」の日本語訳を参考に行います。

また説明の中にある「体重減少」も定義とグレードがあるので、これも別の有害事象としてデータ収集します。

その他「倦怠感」と「疲労」のように定義されても違いの良くわからない症状があるなど悩ましいこともあります。この規準があることで、できるだけ客観的に有害事象が評価できるようになっています。



今回で終了となりますが、つたない説明にお付き合いいただきありがとうございました。皆様のご協力あつての臨床試験なので、今後とも宜しくお願い致します。

イベント情報

第4回登米圏域がん医療講演会 テーマ「がん相談・がん情報提供」
 ■日時：2014年2月7日（金）18：30～20：00 ■会場：ホテル ニューグランヴィア
 ■講師：宮城県立がんセンターがん相談支援センター 松田芳美先生(CNS)
 ■対象者 医療・保健・福祉関係者 ■無料／申込み不要

編集後記

COP通信をご覧いただき、誠にありがとうございます。新しい年が明け、あっという間に年度末です。私が使っている3月終わりの手帳も、残すところあと少しとなりました。手帳というのは「スケジュール管理」だけでなく、「一年間の振り返り」ができる一冊だと思っています。手帳を見返すことで、その時の出来事を思い出して懐かしんだり、忘れかけていた気持ちがよみがえったりします。また、時間が経ってから思い返すことで、その時は必死だったことも、それは自分を成長させてくれた貴重な経験だったことに気づくのです。



私の一年間がギュッと詰まっている手帳は、自分自身を振り返るための大切な一冊となっています。

今があるのも、たくさんの方々のご協力と温かい支えがあったからだと改めて実感しています。これまで推進室の活動にご協力くださった皆様、そして、様々な経験や機会を与えてくださった皆様に感謝いたします。今後も精進してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

MSW(熊坂夏菜子)

【発行元】 東北大学病院がんセンター先進包括的がん医療推進室
 〒980-8574 宮城県仙台市青葉区星陵町1-1
 Tel:022-717-8885 (直通) Fax:022-717-8886 E-mail:cancercenter@hosp.tohoku.ac.jp

【編集委員】熊坂夏菜子 (MSW) 真溪淳子 (保健師)
 小幡 泉 (CRC) 平塚明子 (事務補佐)
 COP通信はみなさまからのご意見やご要望をお待ちしています



このロゴマークは
デザイナーの許可
を得て使用して
おります

活動報告

登米地域在宅緩和ケア普及・啓発市民講座

平成25年10月24(木) 会場：ホテルニューグランヴィア

登米市中田・石越地域包括支援センター 石井 知香子さん

市民講座にスタッフとして参加して

10月24日に、登米地域在宅緩和ケア・普及啓発市民講座『病気になっても自分らしく生きるために』が開催されました。当日は220名ものたくさんの方々にご来場いただきました。

はじめに東北大学病院がんセンター先進包括的がん医療推進室の中山康子先生より「医療と介護を取り巻く現状と在宅緩和ケアの推進にむけて」の講演があり、医療と福祉の現状や様々な治療や療養を選ぶ機会が増えていること、自宅で療養する際に地域の支え合いが大切になることなどをお話いただきました。

次に作成されたばかりの登米地域のリーフレット「がんと診断されて…」に沿って、医療・福祉・介護・患者会のスタッフより、各相談窓口について自己紹介と説明を行いました。参加者からは「一人暮らしで心細かったけれど、たくさんの方々に助けてもらえることがわかって気持ちが楽になりました」というご感想をいただきました。

最後に「あなたや家族が がんと診断されたら」と題して寸劇を行いました。私は寸劇に訪問看護師の役で出演し、小学校以来の劇にとっても緊張しました。出演者は登米地域の医療・保健・福祉・患者会・行政の方々でしたが、みんなの頑張りと励ましで、無事出演し終えたときには、なんとも言い難い感激がありました。

当日の私は周りを見る余裕はなく夢中で終わったため、成果はどうだったのか全く分かりませんでしたが、後日、関係者や知人を介して「とてもよかった」、「わかりやすくて勉強になった」と感想をいただき嬉しくなりました。そして何よりも、寸劇に出演した方々やワーキング部会等の会議に出席された方々と同じ時間を共有できたことが私にとっての宝物になりました。

様々な困難を抱えているがんの患者さんやご家族へ必要な情報提供や支援を行うためには、人と人とがつながり、一緒に考えていくことが大切であると実感した市民講座となりました。



寸劇「あなたや家族が がんと診断されたら」

寸劇「あなたや家族が がんと診断されたら」は、2006年厚生労働科学研究補助金第3次対がん総合戦略事業「緩和ケアプログラムによる地域介入研究(OPTIM-study)」において、山形県鶴岡地域で実施された緩和ケア啓蒙・普及用寸劇シナリオを宮城県登米地域版に加筆・修正したものです。

寸劇の内容は、がんと告知された患者さんと家族が、悩み、葛藤しながらも、医療・福祉・介護専門職からのサポート受けて病に向き合い、自分らしく療養生活を送っていくプロセスを描いています。

寸劇には、登米地域がん患者・家族支援対策推進会議メンバー他の皆さんにご出演いただき、登米市民病院の石井宗彦院長には、医師役の白衣姿でご登場いただきました。

市民講座の参加者からは、「楽しく緩和ケアについて理解できた」、「自分自身や家族ががんになったらについて考えるきっかけをもらった」などのご感想をいただきました。

寸劇の出演者・スタッフの皆さん、ご協力どうもありがとうございました。





～登米地域のクリニック～

登米市立上沼診療所

佐々木 直英 先生

地元に戻って地域で医療を受けたい…という患者さんを積極的に受け入れてくださる診療所です。往診（かかりつけの人は24時間対応）、禁煙外来、夜間外来（第2、4週の17:30～19:30）も実施されています。佐々木先生は優しい声で、安心感を与えてくださる先生で、スタッフの方々も、患者さんに丁寧で温かい対応をされています。

子どもからご年配まで安心して通える診療所です。



医療法人社団頌和会

佐藤内科医院

佐藤 尚 先生

佐藤内科医院は木造建築の温かい雰囲気でした。院内処方をしており、高齢者や移動に困難な患者さんにとっても負担の少ない医院です。

佐藤先生は、患者さんの話に丁寧に耳を傾け、地域医療機関との連携を図りながら、患者さん中心の医療を提供されています。一人ひとりの希望に沿った対応をされており、患者さんに対する思いが現れていて、とても頼もしく感じました。



千葉医院

齋藤 順子 先生

寛大でやわらかな包容力をお持ちの齋藤先生は、子どもからご年配の方まで幅広く診療しておられました。糖尿病の患者さんも多く治療されています。登米市訪問看護ステーションとの連携も強く、地域の方々の暮らしをサポートし温かく見守る先生でした。

「かゆいところに手が届くような感じで利用してくればいい」と、とても広い心で患者さんを受け入れてくださいます。



桜井医院

桜井 眞一 先生

開業から30年以上経つ桜井医院は、長年にわたり地域の方々の生活を支えてこられました。かかりつけの患者さんに限っては、緊急時には24時間で往診して下さるそうです。

桜井先生は優しく包みこんでくれるような方で、院内もアットホームで温かい雰囲気です。患者さんの言葉にじっくり耳を傾け、患者さんが理解するまで優しく説明をされる、心に寄り添った診療をして下さる先生です。



おおともクリニック

大友 信也 先生

通常の外来診療に加え、特別養護老人ホームの嘱託医をこなすなど、地域で生活する方々のために日々活躍されています。

大友先生にお会いして、「気持ちを理解し、親身になってくれる先生」という印象を受けました。「患者さんの望む医療を提供する」ということを大切にされ、患者さんにとって納得のいく医療が提供できるよう、気持ちに寄り添いながら診療して下さる先生です。



ささはら総合診療科

笹原 政美 先生

患者さんを継続的にサポートして下さる、安心と信頼の地域の頼れるクリニックです。

診察において「患者さんの気持ちを引き出す、感じ取るという医師側の努力も必要」とおっしゃる笹原先生は、患者さんの気持ちをよく理解して下さる、とても温かい先生です。これまで多くの患者さんから親しまれ、信頼されてきたことが、先生の温かい対応や院内の雰囲気から伝わってきます。



お忙しい中、訪問を受け入れて下さった先生方、スタッフの皆様、誠にありがとうございました

今回ご紹介したクリニックのより詳しい訪問報告を、当推進室ホームページにてご覧いただくことができます。また、今号でご紹介しきれなかったクリニックの訪問報告も掲載しておりますので、是非ご覧ください。

当推進室ホームページ：<http://www.hosp.tohoku.ac.jp/cc/cop/cop.html>

「がん情報みやぎ」：<http://cancer-miyagi.jp/>

第3回 登米圏域がん医療講演会

平成25年10月4日 会場：ホテルニューグランヴィア

テーマ：セルフケア・副作用対策

講演：石巻赤十字病院 腫瘍内科部長 大堀 久詔 先生
「消化器がん薬物療法における支持療法」



登米市市民生活部健康推進課 千葉 ますみさん

今年度3回目となる登米圏域がん医療講演会が、10月4日にホテルニューグランヴィアにおいて開催されました。石巻赤十字病院の腫瘍内科部長の大堀先生による「セルフケア・副作用対策」をテーマとした講演でした。

先生のご専門である腫瘍内科で担当しているがん患者さんの大部分は、治療によってがんの治癒を目指すことが困難な方々が多いといえます。これまでは、がんの治療と言えば「手術か放射線療法」、そして「治療は病院で」と希望されたものでした。しかし今では、次々と新薬が出るなど薬物療法が進化し治療効果が向上、それに伴い在宅を含め治療の場が多様化しているということでありました。

先生から「がん治療は、在宅療養が当たり前になりつつあり、それぞれの治療期間中の生活の質を高めながら、生きがいのある一生を過ごしてもらいたい」というお話と、そのためにも、「治療による副作用やがんの症状の緩和には、何らかの対処法があることを知ることが大切。人任せにするのではなく、気がついた人が積極的に関与していくことが大切」と、メッセージを送られました。私たち在宅療養を支援するスタッフは、多様な分野との連携が必要となり、顔と顔が見える関係をつくっていかねばならないと改めて感じた講演会でありました。



平成25年度 気仙沼地域がん患者のケア等に関する研修会

平成25年10月12日 会場：宮城県気仙沼保健福祉事務所大会議室

テーマ：がん患者が地域で生活するために、支援者が持つべき心構え

講演：医療法人聖徳会 小笠原内科 理事長 日本在宅ホスピス協会 会長 小笠原 文雄 先生
「生活者の視点を踏まえた上で支援者ができることを考える」

広域介護サービス気仙沼 鈴木 百香利さん ～『思い』を支える～



10月12日、がん患者のケア等に関する研修会に参加させていただき、小笠原文雄先生の講演を拝聴しました。「末期のがんの患者さんが、在宅で疼痛コントロールができ、穏やかに最期を迎えることができる。ひとり暮らしでも家で死ぬという選択肢がある」ということに、私はとても感銘を受けました。それは、多職種連携がしっかりと取れているからこそ可能になるのだと思いました。支援することにより苦しみや和らげる、そこに生きる力が出て延命効果につながるという在宅ホスピス緩和ケアに、私はますます興味を持ちました。

私は在宅でのケアマネジャーを10年ほど勤めていますが、これまでも末期がんの利用者さんのケアマネジメントをすることも多く、そのほとんどが「家で過ごしたい、病院で最期を迎えたくない」という方々でした。家族も最初は「家で看取りたい、穏やかに過ごさせてあげたい」という

思いはあります。しかし、現実には患者さんの疼痛のコントロールが難しくなって、体力低下や薬の副作用での幻覚症状等で、家族は介護に疲れて不安感が強くなり、最終的には病院で最期を迎える方が多いのが現状です。私も、家で過ごしたいという思いを少しでも支援できればとケアマネジメントをしてきましたが、目標を達成することなく終結してしまう悲しい現状に納得できずに、落胆の繰り返しでした。

近い将来この気仙沼地域でも、医療と介護の多職種連携が取れ、在宅ホスピス緩和ケアが可能になり、末期のがん患者さんの「思い」を大切にできるようになれば良いと切に願います。また私も在宅緩和ケアチームの一員として、その「思い」を支えていきたいと改めて思いました。



がん患者さんのための「かかりつけ医マップ」クリニック訪問レポート

当推進室が立ち上げたがん情報ポータルサイト「がん情報みやぎ」内にある「がん患者さんのためのかかりつけ医マップ」では、がん治療中の患者さんでも対応して下さる内科・外科を専門としているクリニックを掲載しております。

現在、「かかりつけ医マップ」にご参加いただいているクリニックを訪問中です。そこで今号では、平成25年10月～11月に訪問してまいりました、登栗・登米原地域のクリニックをレポートしたいと思います。

～栗原地域のクリニック～

公益財団法人 宮城厚生協会 くりこまクリニック 大竹 康彦 先生

「くりこまクリニック」は、訪問看護ステーション、通所リハビリテーションを有しており、日常診療から訪問診療、デイケアまで、医療と福祉の双方から地域の方々をサポートしているクリニックです。大竹先生はとても温厚で、笑顔が素敵な先生です。我々の話にじっくりと耳を傾け、優しく対応していただきました。

写真からも伝わってきますが、スタッフ皆様、温かい雰囲気をお持ちです。



医療法人水天会 宮城島クリニック 宮城島 堅 先生

内視鏡検査も実施され、予防接種の種類も多く取り扱ってられるクリニックです。また、発熱外来を設け、有熱の患者さんに対し別室での対応をされているそうです。「開業医は家庭医である」とおっしゃる宮城島先生は、外科、内科と幅広い範囲での医療を提供してられます。

地域の方々の健康を支えるべく、「可能なかぎりなんでも実施します」と、医療に力強く取り組んでられます。



医療法人社団玄成会 達内科小児科 佐藤 自伸 先生

長年の経験をもとに、消化器系悪性腫瘍の診断、慢性腎臓病、人工透析などの専門的な治療も行っております。院長の佐藤先生は、「その人の人生をお預かりしているという気持ちで医療に取り組んでいる」と患者さんだけでなく、ご家族の方々との繋がりも大切にしておられました。

治療だけではなく患者さんの心のケアにも重点を置き、細やかな配慮と責任を持った医療を心がけてられます。



萩野診療所 島田 龍太郎 先生

萩野診療所は内科系疾患のみならず、様々な疾患のプライマリ・ケアの実践、認知症ケアなど、幅広い分野での診療をされておられます。患者さんの気持ちに寄り添った医療を心がけているクリニックです。島田先生は、過疎高齢化地域で増加する認知症患者さんを救うべく、市と協力し対策に取り組んでおられました。

先生の第一印象は「パワフルであったか包容力」。優しく安心感を抱かせてくださる先生です。



医療法人社団公和会 きくた内科クリニック 菊田 公一 先生

内科全般幅広く患者さんを診療しておられます。BPM（24時間の血圧測定）も行っており、在宅医療については訪問看護師と連携しながら、24時間体制で対応しておられます。患者さんが納得して医療を受けられるよう、気持ちを理解することを心掛け、患者さんと医師との相互理解を大切にしておられました。

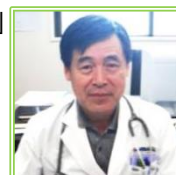
看護師さんからの絶対的な信頼を受けており安心感のあるクリニックです。



医療法人社団 平田内科整形外科歯科 平田 徹 先生

内科医、整形外科医、歯科医が常勤する診療所です。往診にも臨機応変に対応しており、栗原中央病院からの末期ケアや看取りの依頼にも対応しておられます。患者さんの家庭環境や生活面なども考慮し、本人のご希望に沿った一番の良法を提供していただきます。

「中心は患者さん。自分はサポート」とおっしゃる平田先生は、患者さん中心の細やかな診療を心がけてられます。



がん患者さん支援のためのピアサポーター研修

平成25年11月15日(前半)、29日(後半) 会場：宮城県登米保健所大会議室



「ピアサポート」とは、がんという病気を体験した人やその家族などがピア(仲間)として「病気を共有し、ともに考える」ことで、がん患者やその家族などを支援していくことを指します。そのピアサポートを行う人を「ピアサポーター」といいます。

平成24年度 厚生労働省委託事業 がん総合相談に携わる者に対する研修プログラム策定事業作成の「研修テキスト がんピアサポーター編 ～これからピアサポーターをはじめる人へ～」を用いた

ピアサポーター育成研修を、宮城県内で初めて当推進室が開催しました。2日間にわたる研修には、がんの患者さん、ご家族、ご遺族と、支援者の立場にある看護師、ケアマネジャー等の計17名の皆さんにご参加いただきました。研修終了後には、2日間の研修課程を修了した15名の方々に、終了証書をお渡しすることができました。

涙あり、笑顔ありの大変暖かな雰囲気にも包まれたピアサポーター育成研修となりました。



ピアサポーター育成研修に参加して

S さん

「ピアサポーター」のこの言葉は、今まで聞いたことがありませんでした。しかし、「自分でも力になれることがあるのでは?」と思い、この研修に参加しました。

2回にわたる研修はとても有意義な時間で、ピアサポーターの役割と重要性を感じました。がん患者さんの気持ちを理解して受け止めるということは、できるような気がしていましたが、実はとても難しいことがわかりました。

大切なことは、患者さんやそのご家族の話を耳を傾け、相手のペースに合わせて会話を進めること。そして、自分の体験を話しながらも決して押し付け

ないこと。このようなコミュニケーションを積み重ね、一步一步ピアサポーターの役割を担っていくことができればと思いました。

がんになったら、つらい体験を1人で乗り越えるのではなく、家族や医療従事者、または、ピアサポーターが皆で支えていけるような体制になることを願っています。

今回この研修に参加させていただき、本当に貴重な時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。



居宅介護支援事業所 ケアプランセンターせくれ 渡邊 さち子さん

「ピアサポーター」の言葉の意味さえわからないまま参加した今回の研修でした。仕事とプライベートの部分でのがん患者さんとの関わりに、模索・不安・疑問を持ちながら携わっていたため、自分自身の「心のあり方」を学びたいと思いました。

グループメンバーは、がん治療中の患者さん・医療現場で働いている看護師さん・病院連携室相談員さんなどの方々でした。地域や立場もそれぞれでしたが、1人ひとりが皆明るく前向きで、「これからの日本の地域医療を何とかしよう!」というくらいの勢いとパワーが感じられました。初めて顔を合わせる方がほとんどでしたが、共通する「想い」が一緒であることで初対面とは思えないなど、研修をスムーズに始めることができました。

地域医療連携室等の機能が整備され、在宅緩和についての研修会の回数も多くなった現在ですが、小さな一歩がとても大事だと思います。患者さんの個性があるように、ピアサポーターもまたそれぞれの経験を生きた言葉で伝え、繋がることで大きな力になることが重要であると実感しました。相手を理解し、少しでも痛みをわかってもらう姿勢が大切であり、「解決の糸口を一緒に探すこと」ことがピアサポーターの役割であることを学びました。懇意のピアサポーター研修に参加させていただいたことに感謝いたします。

